

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(国語)
／永田 良太

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

1. 目標・計画

これまで、担当の授業においては、教育実践を見据えつつ、知識および思考力の修得に重点をおいてきた。講義科目においては当該分野に関する幅広い知識を授けること、演習科目においては自ら深く考える力を養うことをそれぞれ目的としてきたが、これらの力は相互に結びつくことが望ましいため、本年度は、講義科目においても、一方的な講義形式ではなく、ディスカッション形式の授業形態を取り入れたい。また、その際には、日本語学習者でもある留学生とのディスカッションを積極的に取り入れることで、より実践に即した形での知識の習得に努めたい。

2. 点検・評価

教育実践力の基礎となる知識と思考力を培うために、本年度は授業の中で積極的にディスカッションを取り入れた。前期の「講義」科目では資料にもとづいたディスカッション形式の授業を行うことで、専門的知識の習得と定着を図った。また、後期の「演習」科目では、論文にもとづいたディスカッションを行うことで、思考力を培うことに努めた。その際、日本語学習者でもある留学生の参加が得られたことで、より実践に即した形での学習を行うことができた。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

指導学生に対して、教員採用試験や学会発表などの目標を早期に意識化させることで就職および学習・研究に対する動機づけを行う。また、地域の日本語教室など、学生が日本語指導に携わる機会を学外にも多く設けることで、学生の教育実践力の向上に努めたい。

2. 点検・評価

指導学生に対して、教員採用試験や学会発表などの目標を早期に意識化させ、大学生活および研究に対する動機づけを行ってきた。その結果、教員採用試験や学会発表に向けての精力的な準備が進められ、学部
の指導学生はいずれも教員採用試験に合格した。また、大学院生においても学会発表を行い、研究を深めることができた。さらに、鳴門国際交流協会と協同で地域日本語教室を運営し、日本語教育の実践に積極的に取り組ま
せることで、教育実践に対する意識の高まりが見られた。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

日本語教育に生かすため、日本語の会話の規則を明らかにする。具体的には、日本語母語話者の談話資料
を分析することを通して、日本語による会話終結の規則を解明する。また、これまでの研究成果をもとに科学研
究費補助金に応募するなど、外部資金の獲得にも努めたい。

2. 点検・評価

日本語の会話教育に生かすため、日本語母語話者の会話の終結に関する規則を明らかにし、研究成果は学
会誌に掲載された。また、外部資金の獲得に努めるべく、予定通り、科学研究費補助金への申請も行った。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

大学院教務委員としての業務を遂行するとともに、自らの専門を生かし、留学生の学修・生活支援に努める。
また、各種の大学行事やコースの行事にも積極的に関わりたい。

2. 点検・評価

大学運営に関しては、大学院教務委員としての職務を遂行し、修士論文発表会や口述試験など、所属コースに
おける教務関係行事の準備も行った。また、外国人留学生プログラムコーディネーターとして、留学生の学修・
生活支援に積極的に努めた。加えて、大学院定員の充足に関しても、松山東雲女子大学で実施された大学院
説明会に参加するなど、積極的に取り組んだ。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

本年度は、特に社会貢献および国際交流に重点を置いて活動したい。まず、鳴門国際交流協会と連携して開設した日本語教室の運営に関わり、鳴門市在住の外国人に対する日本語支援を行う。また、国際交流に関して、協定校等からの留学生を受け入れるとともに日本人学生との交流を積極的に促し、学生レベルでの国際交流の実現に努めるとともに、自らも海外の大学の研究者との交流を積極的に行いたい。

2. 点検・評価

社会貢献に関しては、鳴門国際交流協会と連携して、鳴門市在住の外国人を対象とした日本語教室において、学生とともに日本語支援を行った。また、国際交流に関しては、北京師範大学や青島大学といった協定校からの留学生を受け入れ、学生間の交流を図るとともに、自らも協定校の教員を中心とした海外の研究者と積極的に交流を行った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

平成23年度の特記すべき事項として、国際交流および社会との連携が挙げられる。国際交流に関しては、北京師範大学や青島大学といった協定校からの学生を受け入れ、学生間の交流を図るとともに、自らも積極的に交流を行った。また社会との連携に関しては、地域における外国人の日本語支援に学生とともに携わった。近年、大学における留学生の受け入れと国際交流の必要性は一層高まりつつある。また外国人の増加に伴い、地域における日本語支援の必要性も高まりつつある。このように協定校の学生と積極的な交流活動を行うことができたこと、および、地域の日本語支援に貢献できたことは平成23年度の成果として挙げられる。